

## オーセンティックな英語習得支援のための教師の役割

### —コーチとしての教師—

金 在 明

#### 一、はじめに

学校教育における教師の役割は学習者の英語習得にどのように影響を及ぼしているのだろうか。本稿では、この教師の役割を明らかにするとともに、英語の習得との関わりについて検討を加えたい。生徒の英語習得の状況を見てみると、教師の役割にある種の問題点を指摘することができる。例えば、オーセンシティブ注1のある英語テキストを用いたとしても、それだけではオーセンシティブな英語習得を学習者側に期待することは難しい。我々がオーセンシティブのある英語テキストであると認識し学習者に提供しているようなテキストや、また学習者自身がオーセンシティブなものとして受容している

英語情報といったものを吟味するとき、そのようにオーセンシティブなものだと判断した情報が、実は「思いこみ」によるものであり、オーセンシティブなものとはいえない英語資源であったという結論に至る場合も少なくないのである。昨今では一般の生活にインターネットが普及しつつあり、そのインターネットを利用することにより様々な英語情報を入力することが可能となった。しかしながら、その反面、入手できる全ての情報から、学習にとって適切なオーセンシティブのある情報を取捨選択することも同時に求められるようになったといえる。また、教師にとっても、学習者にそのようなオーセンシティブのある情報を適宜提供することが求められるようになったのである。この点において、インターネットを利用したオーセンシティブな英語習得を支援する

ためにも、教師に求められる役割について明らかにする必要があると考える。

本稿では、インターネット上のオーセンティックな英語をテキストの一部として利用する際の、オーセンティシティのある英語習得を支援するために求められる教師の役割について明らかにする。特に、ネーティヴスピーカー<sup>注2</sup>でない英語教師(例えば、日本、韓国の英語教師)が、生徒の英語習得の支援を行う上での役割について考えていきたい。

ここでまず、ネーティヴスピーカーでない英語教師の資質にみられる問題点について検討を加えてみることにしたい。状況学習論からみると、ネーティヴスピーカーでない人は、英語が実際使われている状況の範囲外において生まれ育って来たため、英語によって支えられ存続してきた英語社会共同体といった状況には埋め込まれてこなかった。従って、英語を母国語としない人は、英語が持っている固有の意味やニュアンス、あるいはそれを使用する状況によって異なる微妙な意味の差などといったオーセンティシティのある直感を十分に持ち合わせていないといえる。つまり、ネーティヴスピーカーでない英語教師は英語言語についての精通した知識や直感の

ような熟練的資質を身につけていないということができ

る。

このようなネーティヴスピーカーでない英語教師の下における教師主導の学習、または教師が一方的に生徒に教え込むといった学習活動の組織化は、生徒の英語習得において、オーセンティシティを低くする結果につながるのではないだろうか。つまり、ネーティヴスピーカーが用いる英語とは異なりを持って習得がなされてしまうとみることができるのである。ネーティヴスピーカー並みの英語の知識と直感的な資質を持ちあわせていない教師、つまり英語領域の熟練者でない教師が直接生徒に英語を教え込むということは、教師が持っている英語の知識や直感が生徒の英語習得に転移されてしまうなどの影響を及ぼし兼ねないため、結局オーセンティシティのある英語習得を妨げる結果となると考えられるのである。

従来の学校教育において、教師は、彼自身の教授する領域において、その分野の専門家並みの精通した知識を身に付けており、そのすべてを生徒たちに直接教えることが可能であった。もともと、教師は自身の指導する専門領域において、すぐれた熟練者レベルの実力を持つことが望ましいのである。しかしながら、領域によつては

それが不可能な場合も少なくない。このことから、教師が自身の専門領域において熟練者並みの熟練を持ち得ない場合に備えることが必要となるのである。例えば、学校教育における外国語としての英語習得において、ネイティブスピーカーでない英語教師の場合は、英語という領域においては、ネイティブスピーカー並みの熟練者にはなり得ないため、それに備えることが必要となるのである。このように、オーセンシティブのある英語習得を支援するためには、従来にみる教師の役割は変化せざるを得ない。その代案となる新しいモデルが教師の役割に求められることになる。即ち、教師がネイティブスピーカーでない状況下であっても、オーセンシティブのある英語習得を学習者自身において可能とするために、その改善の策としての方法が考えられなければならないのである。

## 二、「コーチとしての教師」

状況学習論の学習モデルにおける教師の役割の中に「コーチとしての教師」がある (Tripp, 1996)。コーチとしての教師における「コーチ」という概念には、必ずし

もすぐれた熟練の運動選手であるといった意味はない。年下の運動選手は、コーチを観察することによりわざを学ぶのではなくて、先輩の運動選手の動作をこっそり見習うことにより、わざを学ぶのである。Tripp (1996) は、「コーチの主要な役割として、運動選手をせきたてること、動機づけること、批判することがある」と述べている。このようなコーチが果たす役割を適用するに当たって、McLellan (1996) は、「コーチとしての教師」としての概念は状況学習論の中心概念である」と主張し、その役割として、「学習者の学習行為をそばで観察し、ガイドすることであり、必要なときに学習ができるように足場づくり (scaffolding) をすることであるが、それ以外は、学習者が自らのイニシアチヴを持つて疑問や課題を解決していくために、つまり学習者が自ら学習を構成していく機会を与えるために、教師は目立たないところに姿を消すのである」と述べている。

ここでの教師は、もはや知識の伝達者ではなくて、学習者の知識構成の援助者になるといえる。言い換えると、教師の役割とは自身の教える分野のすべてを知り、そのすべてを教えるということから、学習方略のコーチへと転じることであるといえる。要するに、英語のネイティ

ヴスピーカーでない教師が、生徒のオーセンティシティのある英語習得を支援するためには、従来のように英語のすべてを知り、そのすべてを教えることではなくて、オーセンティシティのある英語を提示して、生徒の学習活動をそばで観察し、ガイドするなど、必要な時にのみ支援するといったような学習方略のコーチとしての役割に移行する必要があるということになる。

このコーチとしての教師の役割を、状況学習論 (McLellan, 1986) に基づき、以下の2つに分けて考察する。

## 二一 足場づくり (scaffolding)

オーセンティシティのある英語習得のために、ネーティブスピーカーでない教師は、自身が持っている英語の知識や直感などが生徒側に転移しないよう配慮することが求められる。この転移を回避するための方策の一つに、「足場づくり (scaffolding)」 (Young, 1994) の役割がある。例えば、外国語としての英語リーディングの学習において、生徒がある英文の意味把握ができない場合をとりあげてみよう。このとき、教師は生徒に間いかけをしたり、文法的ヒントや手がかりを提供することにより、

その文のコンテキストをもとに生徒自らが意味の把握をするように誘導することが「足場づくり」の一つの例であるとされる。Young (1994) によると、「足場づくりは、学習コンテキストによって与えられる学習者統制の程度と直接関係している」と説明される。つまり、生徒が学習コンテキストのすべてにアクセスすることにおいて最初は制約がかけられるものの、可能な限りすばやくこのような制約を取り除いていく過程を意味するのである。従って、状況学習論の「足場づくり」において注意すべきことは、生徒が自力で学習することができる時点で、如何にすばやく生徒側におかれた制約を取り除くことができるかにかかっているといえる。

「足場づくり」としての教師の役割は、ヴィゴツキーが主張した「最近接発達領域 (zone of proximal development)」に由来している (Young 1994, Harley 1986)。最近接発達領域とは、「子供が自力で行う問題解決の水準 (現実的発達水準)」と、大人の援助や助言の下で、或いは自分より能力のある仲間の協力の下で行われる問題解決の水準 (潜在的発達水準) との間にあるへだたり」 (ヴィゴツキー、一九七八) を意味している。ここでいう現実的発達水準から潜在的発達水準への移行に際して状況学習論で主張す

る「足場づくり」としての教師の役割が機能するのである。

Hayley (1996) は、「状況学習論における教師の役割は生徒の学習活動を指導することではなく、支援することである」と述べて、「このような役割が教授的足場づくり (instructional scaffolding) である」と主張している。要するに、オーセンティシテイのある英語習得のために求められる教師の役割として、まず、教師自身が持つている英語の知識とか、直感を生徒に轉移しないようにするということが重要であり、そのためにも必要なきに留めて外的支援としての「足場づくり」を行い、生徒自らの学習活動を保証しようというのである。ネーティヴスピーカーでない英語教師は、ネーティヴスピーカー並みの英語の知識や直感的な資質を持ちあわせていない。このため、この教師が英語授業において一方的に教えることで、結局、生徒の英語習得に際するオーセンティシテイを低めてしまうことになるだろう。オーセンティクな英語習得のために教師側に求められる役割は、生徒が願くときのみに限って支援するといった「足場づくり」として機能するものであるといえる。

## 二二 教育的配慮

インターネット上には、考えられるあらゆる事柄について英語による情報が載せられている。その中には、生徒の教育に望ましくない内容の英語が多く存在している。つまり、WWW上のオーセンティクな英語の中には、暴力や猥褻な内容を含む英語もあるといえよう。このような英語情報は、望ましい人格形成を目的とするといった教育的見地からみると、学習の素材として適切であるとは言い難い。従って、オーセンティシテイのある英語を提供するためにも、望ましい人間形成に不適切であると考えられる内容が含まれた英語情報をテキストとして利用することは避けなければならない。

勿論、「このような情報に生徒たちが接することを防ぐためのいろんな対策が施されているが、根本的なところまでは不可能である」ということも一方で指摘されている (Teeora, 一九九七)。従って、インターネット上の英語をテキストの一部として利用する際には、このような問題への対策が教師一人一人に求められるのである。つまり、ここで求められる教師の役割は、望ましい人間性を育成するといった教育的配慮を重視する教育者としての役割であるといえる。例えば、教師はインターネッ

ト上のオーセンティックな英語の中から教育的に適切な内容があるサイトを調べ（選択し）、ブックマークをつける必要がある、一方で、教育的に望ましくない内容を含むサイトにはアクセスしないようにする必要がある。

### 三、おわりに

では、学習者のオーセンティックな英語習得のために、コーチとしての教師と熟練者との間にどのような関わりがみられるのだろうか。ここでいう外国語として英語習得の状況における熟練者とは、目標言語のネイティヴスピーカーを指している。英語のネイティヴスピーカーでない英語教師は、英語という領域においては、ネイティヴスピーカー並みの熟練者にはなりえないため、熟練者であるネイティヴスピーカーからオーセンティックな英語（熟練者の資質）を求めて、これを学習者に提供することが学習者のオーセンティックな英語習得のために必要とされる役割となる。つまり、教師にネイティヴスピーカー並みの熟練（ここではオーセンティックな英語）を求めることができない場合における次善の策として、ネイティヴスピーカー並みの熟練を教室の中に提供する

ことが、教師に求められるのである。

近年、インターネットのようなコミュニケーション・ネットワークの発達によって、日本あるいは韓国にいなながらも、オーセンティックな英語資源に簡単にアクセスすることができるようになった。このような状況下における英語教師の役割とは、インターネットのようなテクノロジーを利用してオーセンティックな英語を学習者に提供することであるといえよう。McLellan (1996)は、「テクノロジーは状況学習論を現実的に成り立たせるのに必須となる道具として中心的な考慮対象となりつつある」と述べている。つまり、テクノロジーによって支えられるとき、状況に埋め込まれた学習が教室の中で実現可能なものとなり、同時に教師のテクノロジー利用の役割が益々求められることになるのである。ここで要求される教師の役割とは、情報テクノロジーをうまく使いこなすことであるといえる。つまり、教室の外側にある実際のオーセンティックな英語へのアクセスを可能とする上で、インターネットのようなテクノロジーを利用することが考えられるが、これを利用する役割を教師に求めるのである。

ところが、生徒側にオーセンティックな英語を提供す

るということを考えた場合、教師にテクノロジー利用の

能力さえあればそれで十分だといえるだろうか。Levin

(1997)によると、「現代はネットワークに基づいた学習環

境が備わっており、このような分散されたネットワーク

の特性を生かして、認知の状況的性質を効果的に利用す

ることが教師側に求められる最適の役割モデルである」

と述べ、「これこそ状況学習論が主張するオーセンティシ

テイのある学習を実現可能にする」と主張している。つ

まり、教師がインターネットを授業で使うために求めら

れる資質として、単にインターネットの操作をするだけ

でなく、適切な学習資源へのアクセスの仕方、資源の価

値を見抜く能力、いろいろな情報に振り回されないような

能力などが求められるようになったのである。英語教師

の場合、オーセンティックな英語(適切な熟練)を識別

するとともに、ネットワーク・テクノロジーを利用して、

このような熟練を検索するために必要とされるテクノロジー

利用の役割も求められることになったといえる。教

育的に望ましいオーセンティックな英語を、豊富なイン

ターネット上の英語から見分ける資質が必要とされるよ

うになったのであり、同時に、インターネットのような

テクノロジー利用の資質が英語教師にも求められるよう

になったのである。

注1 ッオーセンティシテイ」の概念を「英語のネーティ

ヴスピーカーにより日常の言語活動で使われている

言葉が、当該の英語テキストの中に元のままで

保たれている程度」と定義づける。

注2 本稿において、ネーティヴスピーカーとは、ある

言語を幼児期から日常生活で使い、最低限その言

語により高校の教育まで受けた者を指す。その言

語に対する直感的な資質、言語運用能力、文法を

身に付けた者、即ちその言語の習熟した使い手を

指している。

## 引用文献

- 1) Brown T. S., Collins, A. & Duguid, P. (1989). Situated Cognition and the Culture of Learning. *Educational Researcher*, 18 (1), pp. 32-42.
- 2) Tripp, S. D. (1996). Theories, Traditions, and

- Situated Learning. *Situated Learning Perspectives*. Educational Technology Publications, New Jersey, p. 159
- ㉔ Ibid, p. 159
- ㉕ McLellan, H. (1996) Situated Learning: Multiple Perspectives. *Situated Learning Perspectives*. Educational Technology Publications, New Jersey, p. 11
- ㉖ Young, M. F. (1994) Instructional Design for Situated Learning. *ETR & D, Vol 41, No.1*, pp. 46-47
- ㉗ Ibid., p. 46
- ㉘ Harley, S. (1996) Situated Learning and Classroom Instruction. *Situated Learning Perspectives*. Educational Technology Publications, New Jersey, p. 117
- ㉙ ナベトウキキ (1997) 野矢トウキキ (上)°。野矢トウキキ 著 柴田藤次 監
- ㉚ Harley, S. (1996) op. cit. 6), p. 117
- ㉛ Truett, C., Scherlen, A., Tasher, J., & Lowe, K. (1997) Responsible Internet Use. *Learning and Leading with Technology* March 1997, pp. 52-55
- ㉜ McLellan, H. (1996) op. cit. 3), pp. 12-14
- ㉝ Levin, J. (1997) Conceptual Frameworks for Network

Learning Environments: Constructing Personal and Shared Knowledge Spaces,  
[http://www.ed.uiuc.edu/Tra/Papers/IL\\_EdTable/](http://www.ed.uiuc.edu/Tra/Papers/IL_EdTable/), 1998. 2. 20  
 収録